

# 『豊饒の海』論

## その一 『春の雪』

### (一)

『豊饒の海』第一巻『春の雪』の巻末に、作者による後注として、次の文章がある。

『豊饒の海』は『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語であり、因みにその題名は、月の海の一つのラテン名なる Mare Foecunditatis の邦訳である。

大作『豊饒の海』を考察してゆく糸口として、まず右の文章に注目したい。作者の輪廻転生譚への着想は、つとに昭和二十五年のノートに認められるというが(注1)、筆者は未見である。しかし、現実疎外の感覚からくる生まれかわりへの願望、ないし希求は、諸家も指摘するように初期作品にすでに明確に見えており(注2)、三島の氣質が輪廻転生譚へ関心をむけたことは、当然の理路として不思議でない。

『春の雪』と『浜松中納言物語』(以下『浜松』と略称)との関係については、柳田泉に先考があるが(注3)、多少角度をかえてもう一度吟味したい。なお寺田透が次のように言っているのも、それはそれとして後に勘案する必要がある(注4)。

ここで一言付加へれば、『春の雪』巻末の付言にもかかわらず、

『浜松中納言物語』とそれとの関係はほとんど考慮するに価ひしない。清顕と聡子の恋愛がそれと酷似するものを持つとしても、それ

位 藤 邦 生

は、その失はれた「佚亡首巻」と呼ばれる部分のことに限られる。唐の王子として転生した中納言の父といふ説話も、清顕の可能な転生とは大いに異なる……

三島由紀夫が、いうところの典拠として用いた『浜松』佚亡首巻の内容は、取材源を主として松尾聡の研究に負っているとみられ、それは普通昭和三十九年に発行された岩波古典文学大系本によるとされるが、三島の『浜松』との出会い及びそれへの傾斜の時期は、実ははるかに溯ろう。『浜松』佚亡首巻の筋立てを推測再建する松尾聡の研究は、最初、昭和十四年の『文芸文化』に四回にわたって発表されたもので、「平安朝散佚物語攷」と題するこの一連の研究は、その後もつづいて同誌に連載された。そして、翌々年『唐国の物語』が発表された第四巻第九号には、当時「日本浪漫派の周辺にいた」三島少年の作品『花ざかりの森』の名が見える。「みつの浜松の物語」と原題する松尾聡のこの研究を、その時点で三島が属目したであろう可能性は十分に考えられるところで、そうなれば、転生譚への注目の契機は、殆んど彼の作家的出発と同時にあったといえる。

### (二)

ここで松尾聡の研究成果に拠りながら、『浜松』首巻の筋立てを『春の雪』のそれとの類似点に留意しつつ要約すれば、大凡は次の如くであ

式部卿官にひとりの男子があり、その容貌は輝くばかりであった。

(以下に中納言と。)父官はその後薨じ、まだ若かった母はやがて左大将を通わせることになったが、左大将には二人の姫君があり、わけても御髪ゆたかな大姫の美貌は比類がなかった。義兄義妹の間柄、中納言と大姫には自然垣間見の機会も生まれ、中納言はいつか大姫を思慕するようになったものの、大姫付の女房宰相の君のはからいでふたりきりの逢瀬をもつようになってからも、彼の心はなおまことの契りには踏み切れずにいた。ところが、そのような折、帝の御子式部卿官の熱心な求婚があつて、左大将は大姫をこの宮にたてまつることに決めた。そして、その時になつてはじめて、中納言は自分の恋の心あまりの深さに驚き事態を悔むのだった。

一方、同じ頃、中納言はなき父官が今は唐の皇子に転生している由を伝え聞き、自らも夢にみて、俄然渡唐を思い立った。帝の許しを得て渡唐するにあたり、大姫へのかわらぬ思慕と心のこりをおぼえる中納言は、機会を得てついに姫とまことの契りを結んだ。その後宰相の君などはからいで幾度かの契りが重ねられたが、中納言も大姫が妊娠しようとは思ひもよらなかつた。中納言の出發後、やがて大姫には妊娠の兆がはつきりとあらわれて、もはや彼との関係を隠しおせなくなつた。それを知つた父左大将、継母、乳人らの驚愕と悲嘆はいうまでもない。大姫は継母である中納言の母のもとに預けられたが、寂寥と罪悪感に追いつめられ一途におもいつめた彼女は、ついに継母の目を盗んで、何の躊躇もなく、あたら八尺の髪をおろしてしまつた。まわりの人々は再び驚きあわて、善後策を講ずるにだてにさまざまに心を砕いていた。

『春の雪』の筋立てと右梗概の類似については、もはや贅言を要しない。こうして物語の筋だけを辿れば、文章の典雅豊醇を一方で十分に賞でておくにしても、『春の雪』の獨創性が一体奈辺にあるのやらと、多少は心許なく思われてこよう。「たわやめぶり」と言つてこの小説をわかつた気になるのは、作者が言つてはしかつたことをそのまま言つていゝ程度のもので、その実たいして意味はない。また、心理小説としてみれば、『春の雪』は稚拙な作としかしいようがないので、清顕と隠子の恋のかけひきにも作家の新しい発見はない。では、この小説の獨創性はどこにあつたか。次にはそれを考察しよう。

『豊饒の海』における三島のオリジナリティーは、大きくは二つの観点から説明される。一つは前記『浜松』の筋立てに、フランスの思想家ジョルジュ・バタイユのエロティシズムに関する所説を導入し、この二つのものを完璧な形で合体燃焼させた点にある。さらに一つは、作中人物本多繁邦の創造に関わるが、これは『豊饒の海』全体の主題に繋がる極めて複雑な問題を擁しており、後に改めて考察したい。

三島のバタイユとの邂逅は、清水徹のいうように(注5)、昭和三十五年「声」春季号に寄せた『エロチシズム』(翻訳)書評に明らかであり、そのほか野坂昭如との対談や(注6)、遺著となつた『小説とは何か』によつても、バタイユが彼に与えた影響の大きさが知られる。まことにこれは「バタイユ体験」と呼ぶにふさわしい事件で、エロティシズムの美学追求が三島文学の中心課題となるのも、目立ってはバタイユ体験以後であるといえる。エロティシズムは、バタイユの定義によれば、「死にまで至る生の称揚」(渋沢龍彦訳)であり、それまで三島の氣質が面伏せに渴仰し、しかも作品中での正当な場を尋ねあぐねていた諸々

の性向、及び文学的モチーフは、この「死にまで至る生の称揚」たる新しい価値の発見に向かって集約されうる機縁を得た。血醒さへの郷愁も同性愛も、その他様々な性愛の様相も、その燃焼の極みがエロスの全き開花として成就される時、それは人間存在の深淵に届くべき唯一の錘となるので、文学芸術の意味あいもそこを離れては存在しない、というのが、三島がバタイユに啓示された思想の中核であつたろうと思う。前記『エロチシズム』書評の中で、戦後の実存主義について「死と神聖感とエロチシズムとを一直線に結ぶ古代の血みどろな闇からの救ひではない」と断じたとき、三島の脳裏にあつたのは、四散した世界像の統一原理たるエロチシズム復権のために現在の「種々な文化的禁止をいちいち疑つてかか」つたバタイユの精神を継承し、彼の作品に真の「古代の血みどろな闇」を構築してみせる覚悟であつたに違いない。バタイユ体験以後の三島の作品とエロチシズムとの関連については、昭和四十一年に執筆された彼の「谷崎潤一郎論」が、谷崎の作品を語りながら実は三島自身のエロス認識の实体を呈示して甚だ示唆的魅力的であるが野口武彦の考察にまかせて（注7）、ここでは問題を留保しておく。

#### 四

『春の雪』で聡子と洞院宮治典親王との結婚が決定したとき、思いがけず清頭を襲つたのは、次のような歓喜の感情だつた。

さうしてあるあひだも、心は灼熱して、ふしぎな高い胸の鼓動と共に、「勅許」といふ一つの貴い輝やかしい文字を見つめてゐた。つひに勅許が下りた。（中略）

のころ一日を、清頭は飛翔する想像力に身を委ねてすごした。外界は何一つ目に入らず、今までの静かな明晰の鏡は粉々に砕け、心は熱風に吹き乱されてざわめきつづけた。これまでの彼の些少の熱

情に、必ず伴なはれた憂鬱の影は、この激しい熱情の中には片鱗もなかつた。これに似た感情といへば、まづ一番似通つてゐるものとして、歓喜しか思ひ当らない。しかし理由のないこんな激烈な歓喜ほど、人間の感情のなかで不気味なものなからう。

何が清頭に歓喜をもたらしたかと言へば、それは不可能といふ観念だつた。絶対の不可能。（中略）

絶対の不可能。これこそ清頭自身が、その屈折をきはめた感情にひたすら忠実であることによつて、自ら招き寄せた事態だつた。

しかし、この歓喜は何事なのだ。彼はこの歓びの、暗い、危険なおそろしい姿から目を離すことができなかつた。

この部分はバタイユ『エロチシズム』中の所説と次のような密接な対応を見せる。

かくて情熱は私たちを苦悩のなかへ誘ひこむ。それというのも、じつは情熱というものが不可能の追求だからであり、表面的には、つねに危うく保たれた調和の追求だからである。

『浜松』で大姫と式部卿宮との結婚が決まつたとき、大姫への思慕の深さを中納言が俄かに自覚したのは、すでに見たとおりであるが、肝心の首巻本文が散佚しているために、『浜松』がそのところの中納言の感情の動きを、どのように描写説明していたかはわからず、却つてそこに読み手の想像力が沸騰する。三島の想像力も当然そこに働き、一つの解釈を与えた。しかし右の解釈に限つていえば、情熱の法則の一つとしてすぐにも考えつかれることで、その新鮮さを格別ほめるほどのことはない。が、次のような箇所になれば話はまた別である。

結婚の勅許が下つて、はじめて、清頭は聡子への愛情と自分の情熱とを確認し、機会を得て契りを結ぶ。そこから生まれる歓喜の实体への省

察である。(因みに、今私は聡子への愛情と書いたが、厳密に言えばこれは精確でない。清頭の情熱は、偏に聖なる禁止の魅惑と、同時に禁止の違反の暗い情熱とに支えられているので、これを直ちに恋愛の情熱とは呼び難い。清頭は女性としての聡子を愛しているのでなく、ナルシズムの鏡の部屋の中で、しかも恋愛の状況を作り出してくれる稀有の対象としての、聡子の幻に恋をしている。清頭聡子の恋愛が偽物くさく、若い男女の恋愛という点において自然な瑞々しさに欠けているのは、右の理由による。『豊饒の海』には本物の女はひとりも登場せず、みせかけはどうあれ男女の正常な恋愛はひとつも存在しないといえ、極論と思われようが、これについては他日纏説する機会がある。)

清頭と聡子の人目を忍ぶ逢瀬がつづいていた頃のこと、次のように書かれている。

彼はかねて学んだ優雅が、血みどろの実質を秘めてゐるのを知りつつあつた。いちばんたやすい解決は二人の相対の死にちがひはないが、それにはもつと苦悩が要る筈で、かういふ忍び逢ひの、すぎ去つてゆく一瞬一瞬にすら、清頭は、犯せば犯すほど無限に深まつてゆく禁忌の、決して到達することのない遠い金鈴の音のやうなものに聞き惚れてゐた。罪を犯せば犯すほど、罪から遠ざかつてゆくやうな心地がする。

これもまた『エロティシズム』の文章との対応が明白である。引用が少々長くなるが、数箇所を挙げてみよう。

○違反は禁止を除去するのではなく禁止を高めるのだ。そこにエロティシズムの原動力がひそんでおり、同時にまた、そこに宗教の原動力が伏在しているのである。

○エロティシズムの内的体験は、禁止の基礎をなす後めたさに対す

る感受性ととも、また禁止を破りたいという欲望に対する感受性をも体験者に要求する。

○私たちの論理が袋小路に追いつめられる非合理の領域では、次のように考えることが必要である。すなわち、「時として神聖不可侵の禁止は犯される。しかしだからといって、禁止が神聖不可侵でなくなったというわけではない」と。さらに次のような不条理の命題にまでたどりつく。「禁止は犯されるためである」と。この命題は、最初そう見えるような、いい加減なものでは決してなく、反方向に引き裂かれた感情のあいだの避けがたい関係を正確に表現したものだ。もし消極的な感情に支配されているならば、私たちは禁止に従わねばならぬ。感情が積極的ならば、私たちはこれを破る。禁止を犯すということは、その反対の感情の可能性や意味を奪ってしまうということではない。むしろその正当化、その源泉ですらあるのだ。

○違反の明証性がなければ、私たちはもはや、性的な実行の完全さが要求する、あの自由の感情を感じないということがあるのである。したがって、無感覚になつた精神にとっては、快楽の最後の反射運動に近づくためには、時として危険な状況が必要になつてくる。

清頭の感情の動きは、このようにバタイユの理論のいわばなぞりである。中納言と大姫の契りの心理をバタイユの所説に沿つて解釈すれば、この場合の清頭聡子のそれに即応しよう。ただバタイユとの関連で一言注意しておくべきは、清水徹がすでに指摘したように、バタイユにおいて「聖なるもの」と呼ばれた実体が、三島の場合「天皇」に短絡置換されている点で、ここには三島の意識的な曲解がある。それは『奔馬』に至つていよいよ明らかに、三島のバタイユ受容の特異性を示すが、

今は問題の指摘だけにとどめておきたい。

ともあれ、以上の叙述によって、『春の雪』における「浜松」とパタイユ合体の内実は多少明らかになったと思う。そこに三島のオリジナリテイーが認められる。更にこの点に限っていえば、『春の雪』は松尾聡の研究によって「散佚物語の類に、一その想像力を掻き立てられた」

(注8) 三島由紀夫の、パタイユを援用しての「浜松」解釈としても読みうるので、前にあげた寺田透の発言は、威勢がよすぎたの勇み足だといつてよい。余談にわたるが、磯田光一が彼の『豊饒の海』論の中で(注9)、作品読みとりの重要な鍵としてパタイユの所説を度度用いながら、パタイユのバの字も言っていないのも、私には些か面妖であった。

ところで、私はこれまで、『春の雪』を「浜松」と「エロティシズム」との関係において見てきたわけだが、方法上の必然から自然後二者との影響関係にばかり目を注ぐ結果となった。三者の結びつけが三島の発明であるにしても、それは主として『春の雪』に限られ、『豊饒の海』の真の獨創性は、実は別のところに求められる。そしてそれは勿論、第一部『春の雪』にすでに胚胎している。転生譚の構想自体に私がこれまで殊更触れなかったのも、直接そのことと関連するのである。

注1 『三島由紀夫全集』第18巻解題

注2 『三島由紀夫—芸術と病理—』(梶谷哲男) 昭和46年10月、等

注3 『豊饒の海』(「国文学」臨時増刊) 昭和45年5月

注4 『豊饒の海』(「文芸」) 昭和47年8月

注5 『ジヨルジュ・パタイユと三島由紀夫』(「国文学」臨時増刊)

昭和45年5月

注6 「中央公論」昭和41年11月

注7 「谷崎潤一郎論」昭和48年8月

注8 「日本古典文学大系・浜松中納言物語」月報昭和39年5月

注9 「殉教の美学(第二増補版)」昭和46年12月

## その二 本多繁邦の創造

(一)

『春の雪』と『浜松』との筋立て上の相似についてはすでに触れた。

しかし、当然のことながら、『春の雪』には『浜松』にはない構想上の工夫がいくつも見つけられ、しかもそれが『春の雪』を、ひいては『豊饒の海』全体を、きわめて独自の作品にしている。そこで、次にはその点を考察してゆきたいが、ここでは特に登場人物の設定、及びその小説上の布置に注目したい。『浜松』で書き者として描かれていた式部御宮が、それに対応すべき『春の雪』の洞院宮治典王の場合、そのようには全然設定されなかったのも、三島のこうした工夫のひとつであった。が、そういう具合に「ひとりびとり登場人物を考えていく場合、最も重要なのは、作中人物本多繁邦の創造であろう。『浜松』首巻には、本多に該当する登場人物はなく、本多繁邦は純粹に『春の雪』での三島のクリーチュアであるといえる。本多は『春の雪』『奔馬』においては、いわばシテに対するワキの役割を演じているが、作中、次第にその存在の意味を大きくしてきて、『晝の寺』に至って、ついに主人公にかわる。本多が「物語全体を一貫してつなぐ」「実質的な主人公と考える」という、栗坪良樹の意見(注1)を、結論的には私も諾うものであるが、栗坪とは違った角度から考察を進めてみたい。

本多は、作者によって、「ふだんは人に示さない鋭い直観の力を内に

蔵して」いる「理智的な性格」の人物で、「合理的」な思考をこのむ

「認識者」である、というふうに説明された。しかも三島は、本多がかるタイプの「認識者」であったことを、読者に強く印象づけるべく、右のような本多の性格規定を随所で繰り返している。しかしながら、本多の性格及び思考の型を『豊饒の海』四巻にわたってすこし微細に見てゆけば、認識者であるという基本的な性格はかわらないまでも、そこには彼に対する説明の微妙なズレが次第にうかがわれる。すなわち、はじめ「理智的な性格」（春の雪）「理の勝つた性格」（奔馬）「理性に縛しめられてゐた」「理性の自負」（暁の寺）といった言葉で説明されていた本多が、転生の目撃から、次第にその「理智」や「理性の礎」（奔馬）に対して疑いをもつようになると、「感じやすい年令に詳に傍観し」「とにかく本多は見たのである」（暁の寺）「見ることに自分の世界が懸つてゐることを確認した」「見ることの快楽」（天人五衰）というふうに、彼が畢竟「見る人」であったというところに説明の主眼がおかれるようになる。「奔馬」以降の巻々では、「理性」「理智」の語は、多く、本多の内部で、それへの信頼に大きな揺らぎが起つてゐることを示す場合のみ、使われるようになってゐる。そしてこのことはもっと検討されてよい。

たとえば渡辺広士の場合のように、本多を「認識者」と規定するにせよ（注2）、田中美代子のように「理性の人」と呼ぶにせよ（注3）、これまで『豊饒の海』を論じた人の多くは、本多の「理智」や「認識」を彼の本質と看做した上で、それが輪廻転生の目撃によつて次第に崩壊していく過程に、『豊饒の海』の主たるドラマを見い出そうとしていた。しかし、作者の説明を鵜呑みにして、本多を「認識の人」と規定し、それによつてこの小説の構造を図式化することは、果して真に有効である

うか。なぜなら「理性の人」「認識の人」の要素が、確かに本多の大きい特性であったにしても、絶えずそれと平行して、本多は「見る人」であり、かつ「夢みる人」であったからである。「認識」の語が、三島の場合、いかに底の浅い言葉で、曖昧に使われていたかは、次のような例によつて知られる。

老人が海風に向つて歯をむき出して笑ふ笑ひが、透をぞつとさせた。父子の了解点が一つになつた。そのことがほとんど透に殺意を抱かせた。このターミナルから老人を突き落せば、忽ち殺意は成ることを知りながら、その認識さへ老人に覺られてゐると思ふことが、少年の心を萎えさせた。（天人五衰）

『豊饒の海』における「理智」「理性」「認識」の語は、この小説に登場する「見られる人」たち、すなわち清顕、勲らの特性である「感情」「純粹」等のことばと、同等の重みをもつてはいない。作者がどんなに本多を「理智の人」「認識の人」として、読者に印象づけようと図つていても、その理智・認識なるものの正体が甚だ曖昧で、作中人物の思考の実体として血肉化されていない以上、それを「感情」「純粹」等の語或いは輪廻転生の「超認識」と対置して比較考察しても、それによつて『豊饒の海』の眞の構造化ははかれず、テーマ追求の有効な手段にはなれない。

本多は、作者によつて「理智の人」と呼ばれたそのはじめから、一方に「理智」を超えるものへの信仰をきつくもつていた。それを忘れてはならないだろう。

本多は自分の理性がいつもそのやうな光りであることを望んだが、熱い闇にいつも惹かれがちな心性をも、捨てることはできなかった。

しかしその熱い間はただ魅惑だった。他の何ものでもない、魅惑だった。清頭も魅惑だった。そしてこの生の奥底のはうからゆるがす魅惑は、実は必ず、生ではなく、運命につながつてゐた。(春の雪)

本多にとっての熱い間の魅惑は、しかし彼を「死にまで至る生の称揚」に導きはしなかった。本多は自分がそこから拒まれていて感じていた。清頭にゆるされ勲にひらかれた「死にまで至る生の称揚」、即ちエロテイズムへの幸福な殉節から、自分だけは疎外されていると、本多は常に感じていた。彼はそこで(意識せずに)「見る人」の側に自分を置いたが、それはまさに彼にとって運命的な選択だったといえる。

若いころは不安や悲哀やあるひは理智的な明晰を、自分の本質だと考へることがしばしばだったが、そのどれにも本当のものはない。勲の割腹をきいたとき、刺すやうな悲しみよりも、何か徒勞の鈍い重味がすぐさま心にのしかかったが、日を経るにつれて、再会の喜びを待つ気持ちに変わった。本多はそのとき人間的な感情を喪つてゐる自分に気づいた。自分の本質は、この世のものならぬただならぬ喜びに属してゐるのかもしれないのだ。(暁の寺)

ここからも、本多の本質が必ずしも「理智」や「認識」のみにかかわつていたのでないことが知られよう。「豊饒の海」のはじめから本多の気質性格を注意して見てゆけば、彼が意外に夢みる人であり、またそれ以上に、終世「見る人」であつたことがわかる。彼の本質が「見る人」であつたことを示す箇所は非常に多く、煩雜にわたるのでいちいちあげないが、「見ることに自分の世界が懸つてゐた本多にとって、それではその「見ること」がどのような意味あいをもつていたかを、これから考察しなければならぬ。自分の本質は「この世のものならぬただならぬ喜びに属してゐるのかもしれない」と本多が考へた、その「この世

のものならぬただならぬ喜び」の内実を探るのが、さしあつたこの課題となろう。

### (三)

『春の雪』においては、一つには本多と清頭の友情が物語の構成を支えている。本多は清頭と聡子の恋愛の証人であり、転生を孕む清頭の夢の証人でもあつた。清頭は稀に見る美貌の青年ということで、作者によつてその美貌のさまが実に丹念に描写されており、そうした清頭と本多の結びつきは、あらかじめ作者から合理的に説明されている。が、それにもかかわらず、清頭と本多の友情は、我々に一種奇妙な印象を与える。たとえば、鎌倉の別荘へ密会のためやって来た聡子を、東京へ送りどける役を、本多が清頭から託されたときのこと、次のように書かれている。

本多は自分に対する清頭のこんな信頼に、ずつと彼らのふしぎな絆であつた清頭の冷たい毒が、かつてないほど鮮やかに甦へるのを感じてゐた。信頼と侮蔑とが、薄い革手袋と手とのやうに、ぴつたりと貼り合はされ組み合わせられたもの。それを本多は清頭の美しさのために恕したのだ。

本多は、清頭が感情のままに生きるのを、自分にはできないこととして羨んで外から見つめながら、自分に対する清頭の時折の倨傲の振舞を、彼の美しさの故に恕した。こうした友情の形は些か奇妙な印象を与えるが、美貌で、感情のままに生きた清頭が、「見る人」である本多に對して、「見られる人」たりうる資格を完璧に備えていたことは明らかである。本多と清頭は、いわば友情を契約書として、「見る人」「見られる人」の相互契約を結んだのであつた。

『奔馬』の場合、本多が飯沼勲に近づいたのは、本多自身が言うよう

に、「ふしぎな親近の念から」であり、また、彼が職を辞してまで勲の弁護にあたったのは、「清頭を救はうとして救ひえなかつたことが、本多の青春の最大の遺恨であつたのなら、今度こそは救はねばならなかつた」という理由からであつたにしろ、理由はただそれだけではない。清頭を失つた本多にとっては、清頭にかわるべき「見られる人」の出現が是非とも必要だったのである。純粹行為によつて、聖なるものへまっしぐらに近づこうとしていた勲は、本多がはいり入めない世界をはっきりと持っており、本多はまたしても「見る人」の立場を獲得した。勲へ接近する理由を、清頭への贖罪に見つけた本多は、やすんじて、「見る人」「見られる人」の契約を勲と結びえたのである。

#### 四

ここで、今まで述べてきた本多の思考及び行動について、大雑把にまとめておきたい。すでに慧眼の士はお気づきのように、私は主として、本多繁邦のマゾヒズム傾向に目をとめてきた。清頭、勲、ジン・ジャン安永透の四人と、本多との関係を一貫して眺めれば、そこに、本多のマゾヒズムが明瞭にうかがわれる。ところが、作中本多自身は、自分のマゾヒズムに全然気がついていないし、作者三島も、(奇怪なことに)本多のマゾヒズムについては一言も言及していない。「豊饒の海」においても同性愛(慶子とジン・ジャン)や窃視症(本多)などはあからさまに描かれているので、三島がわざと巧んで言及しなかつた、(或いは作者自身にも自覚されなかつた)本多のマゾヒズムが、小説の効果としても、却つて大きな意味あいをもつてくるのである。

ここでありていに言っておくが、私は、精神分析学に関しては、なほどの知識ももっていない。マゾヒズムについては、フロイト及びビル・ドゥルーズの著作(注4)を参考にしたものの、今もよくわかつてい

ない。しかし、右に述べたような本多のある種の性向が、たとえ正確にはマゾヒズムでないとしても、それが彼に、苦痛と同時に被虐の暗い喜びをも齎らしていたことは、本文の中から指摘できる。「天人五衰」で本多は清頭・勲を回想して次のように言っている。

今にして本多は思ひ起した。清頭や勲に対する本多のもつとも基本的な感情は、あらゆる知的な人間の抒情の源、すなはち嫉妬だつたのだと。

これはしかし、あくまでも本多自身の認識の範囲内なので、清頭・勲の存在が本多に対してもつた意味あいには、ときに本多自身の認識が届かぬところにも在った。

……それにしても、或る種の人間は、生の絶頂で時を止めるといふ天賦に恵まれてゐる。俺はこの目でさういふ人間を見てきたのだから、信ずるほかはない。(中略) ああ、肉の永遠の美しさ―それは時間を止めることのできる人間の特権だ。今、時を止めようとする絶頂の寸前に、肉の美しさの絶頂があらはれる。(天人五衰) つまり、清頭・勲は、身をもつて「死にまで至る生の称揚」をはたしエロティシズムの極致に殉じた。そして本多は、外からこれを見ていた。すでに言ったように、本多は、自分が彼らの列に加わることははじめから拒まれていて感じており、自身の参加は不可能と思つていた。本多はそのことによつて傷つくのを怖れ、自分を守るために認識の鎧を身につけたが、実は、自分が自分で不可能をつくりだし、その「不可能」を「見ること」によつて自分を酔わせているメカニズムには気がつかなかった。或いは認めたくなかつたのかも知れない。

本多は犯さぬために不可能をしつらへてゐた。なぜなら彼が犯せば美はもうこの世の中に存在する余地がなくなるからだつた。(暁の



寺)

清頭も勲も完璧な「見られる人」として、本多にとっての「不可能」な存在だった。そしてそれ故美しかった。畢竟本多のマゾヒズムは、このような「見る人」「見られる人」の対立構造が成立するところに、はじめてひっそりと花開き、被虐の情念が織りなす暗い喜びに酔うことができたのである。マゾヒズムもまた、エロティシズムの一方の極致として、エロスの饗宴の正客たるべきは勿論であるが、マゾヒズムの成立には、必ず契約者が必要であり、本多が清頭につながる転生をもとめて彷徨したのも、ほかならぬ新しい契約者を求めてのさすらいであった。

(五)

清頭、勲が理想的な「見られる人」であったことはすでに述べた。さても「あの美しかつた清頭や勲」(暁の寺)と、本多は回想するのである。本多は彼らの世界へ入り込めぬ「不可能」を自らしつらえ、そういう図式の中でこそ、彼の意識の底にある欲望の充足を遂げた。しかし、『暁の寺』『天人五衰』においても、こうした図式が成り立ったであろうが、彼女の場合はすでに、「見られる人」であることの必然性が大げんに稀薄になっている。ジン・ジャンの場合は、彼女が(三つのホクロに保証される)清頭・勲の転生人物であることが、彼女に「見られる人」たる資格を与える唯一の根拠になっているもの、ジン・ジャンの個性は十分に描かれておらず、彼女が「死にまで至る生の称揚」の具現人物として、本多との対立構造を示すまでにはついに至らない。作者はその嗜好を付与してまで、「見る人」「見られる人」の対立構造をなんとか維持しようと図った。しかし、ジン・ジャン自身に「見られる人」で

あることの十分な必然性もはやない以上、「見る人」「見られる人」の対立構造を成立させる基盤も、すでに崩れたと見るほかはなからう。

『天人五衰』の安永透は、いつてみれば本多の似せ絵で、自意識のかたまり、マゾヒズムの陶酔を欠いた本多自身であると言ってよい。従って、ここでは「見る人」と擬「見る人」が並びたつわけになり、「見る人」「見られる人」の対立構造は決して生まれぬ。『暁の寺』『天人五衰』が、『春の雪』『奔馬』に比べて文学としての力をいちぢるしく失うのは、単に前者が観念的であり、文章にもふくらみを欠くという理由ばかりでなく、結局、「見る人」と「見られる人」との緊張関係を成立させる必然性、つまりは、本質的なドラマの要素を喪失したという理由による。

(六)

かくて『豊饒の海』全巻は、マゾヒストとしての「見る人」本多繁邦が、「見られる人」をもとめて彷徨する物語として、把握されうる。本多を主人公と呼ぶ所以である。ところが、本多の場合、「見られる人」の継続の根拠を、彼が「輪廻転生」の観念に結びつけていたところが問題で、多くの場合、主題把握の混乱はそこから起こった。たとえば磯田光一は、「『豊饒の海』の主題は、すでに知られているように仏教でいう輪廻転生である」と言っているが、輪廻転生は、『豊饒の海』の構成を支える一つの重要な枠ではあっても、主題と呼ぶほどのものではない。

繰り返す。契約相手としての「見られる人」を求めて、終始彷徨する本多の暗い情念が紡ぎださせた、マゾヒズムの世界、その世界がそれとしての一貫性を要求して、「輪廻転生」の観念をそこに導き入れたということがある。本多自身は、自分が「見る人」であることを絶えず意識していたが、「見る人」であることの根底にあった、マゾヒズムの奥深

い歓喜については、気づこうとしなかった。公園で若い男女が絡みあう姿態を覗いた本多は、「俺の目を酔はせてくれ、どうか一瞬も早く酔はせてくれ」と切望したが、彼の終生の望みが、実はこのような見ることの悦楽に繋がっていたことを、認めようとはしなかった。作者三島もまたそのことに触れない。だが、それだけに、「見る人」「見られる人」の相関構造を基部で支えたマゾヒズムの存在は、注意すべきで、この、マゾヒズムを根幹とするエロティシズムが咲かせた華麗な花（極言すれば、転生幻想）が、『豊饒の海』の主題であったと考えられるのである。

七

北欧神話によれば、神の国アースガルズは、宇宙をつらぬいて聳える梣（とねりこ）の大樹ユグドラシル（宇宙樹）の樹上にあると考えられ、その宇宙樹が仆れるとき、世界も滅びると考えられていた。「神々のたそがれ」である。本多繁邦の長い人生にあって、彼のマゾヒズムは、いわば彼の宇宙樹であった。『天人五衰』の最後の場面で、今は尼となっている聡子が清頭について次のようにいう。

そんなお方は、もともとあらしやらかなかつたのと違ひますか？ 何やら本多さんが、あるやうに思うてあらしやつて、実ははじめからどこにもをられなんだ、といふことはありませんか？

愕然として、「それなら、勲もゐなかつたことになる。ジン・ジャンもゐなかつたことになる。……その上、ひよつとしたら、この私ですらも……」と叫ぶ本多にむけて、聡子がさらに、「それも心々ですさかい」と言いきるところ、つまりは本多にとっての宇宙樹の倒壊であった。

ひとの意表をつくかかたるドンデン返しは、本多が紡いできた夢を一瞬にして打毀すが、一方で、三島の生のいたましさも、ここに集約されている。小説終末部の巧みさは、常に三島が得意としたところであった。

しかし、本多の夢の否定におわるこのドンデン返しは、三島の夢の否定でもあったわけで、いわば作家の生命とひきかえの、痛ましい芸当であった。

庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしてゐる。……

この大作の最終行は、読者のところをさまざまに思いに染めあげて、深い余韻を響かせている。

注1 作品の分析「豊饒の海」（『国文学・解釈と鑑賞』）昭和47年12月

注2 「豊饒の海」論・昭和47年3月

注3 「豊饒の海」論・昭和46年3月

注4 「マゾッホとサド」昭和48年7月